

## 2025年8月3日聖霊降臨後第8主日の説教

コヘレトの言葉1章2、12-14、2章18-23節

コロサイの信徒への手紙3章1-11節

ルカによる福音書12章13-21節

本日の旧約日課は、「コヘレトの言葉」です。聖餐式聖書日課でこの「コヘレトの言葉」が読まれるのは、三年に一度の今日、C年特定13の主日だけです。この文書は、以前の口語訳聖書では「伝道の書」と呼ばれていました。そう呼ばれた理由は、七十人訳聖書（ギリシア語訳聖書）が、「コヘレト」を「集会で語る人」と訳していたことを参考にしていたからでしょう。20世紀後半から、この「コヘレト」を固有名詞として訳することが主流になりましたので、新共同訳から文書名が「コヘレトの言葉」となりました。

「コヘレトの言葉」は、伝統的には「雅歌」「箴言」と並んでソロモン王が著者とされていました。それは、1章1節に「**ダビデの子、エルサレムの王、コヘレトの言葉**」とあるからです。実際の成立年代は、内容的な事柄から推測して、紀元前3世紀頃とするのが一般的です。旧約続編と並ぶぐらいの成立年代です。その意味では、旧約聖書の一部ではありますが、新約聖書につながる文書といえます。

以前の聖書日課は12節からでしたが、新しい聖書日課になり2節が入りました。この2節「**コヘレトは言う。空の空、空の空、一切は空である**」は、コヘレトの言葉として、あるいは『聖書』の言葉としても有名です。そして聖書日課にはありませんが、3節以降、「**太陽の下、なされるあらゆる労苦は、人に何の益をもたらずのか**」へと続きます。そこから、東西南北、海、山、という地理的な事柄、過去、現在、未来という時間的な事柄、それら外的・環境的な事柄に加えて、人間が生み出した関わる、文化的、政治的、経済的、軍事的事柄など、個人的であれ、世界的であれ、ありとあらゆるすべての現象的事柄を「空である」と結論付けます。今日の箇所も、「**私は、太陽の下で行われるあらゆる業を見たが、やはり、すべては空であり、風を追うようなことであった**」（コヘ1:14）で始まり、2章に入っても、何度も「これもまた空である」と繰り返します。聖書日課は、コヘレトの個人的な言葉として、あるいは「彼の一生は痛み、その務めは悩みである。夜も心は休まることがない。これもまた空である」と「これもまた空である」という結論で終わっていますが、この「空しい」という文言は、そのあともしばらく続きます。そして2章自体は、「**なぜなら、神は御心に適う人に知恵と知識と喜びを与える。しかし、罪人には集め、積み上げることを務めとし、それを御心に適う人に与えてしまうからだ。これもまた空であり、風を追うようなことである**」で終わります。聖書日課を超えますが、3章に入りますと、「**人生は不思議な神の賜物**」という小見出しのもと、「**天の下では、すべてに時機がありすべての出来事に時がある**」（コヘ3:1）と「**～に時がある**」と繰り返される有名な個所に入ります。

「コヘレトの言葉」の一部分にしか触れていませんが、この文書は、旧約聖書がそれまでに語ってきたことを凝縮しているといえます。旧約聖書が語る事柄とは、主なる神様は、信じる人には、地上のあらゆる恵みを与えるはずなのです。すだという前提がありながらも、実際はそうではないという、信仰者が経験する現実です。主なる神様を信じることを通して、この地上で様々な恵みを受けている人もいるかもしれませんが、信じていても地上で幸いを得ず、また悲しい思いをすることもあります。主なる神様を信じない（罪人）が栄える場合があります。またそのような人が、自分こそ主なる神様を信じていると誇る場合があります。旧約聖書は、それらの出来事に満ちています。そして、それら一つひとつを吟味すると、主なる神様を信じる意味とは何であろうか、という問いまで発生するかもしれません。しかし、だからこそ、「コヘレトの言葉」は主なる神様を信じ、その戒め（律法）を守ること以外に、人間にとって信頼できることはないという結論に至るのです。そして、「コヘレトの言葉」は、**「聞き取ったすべての言葉の結論。神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ人間のすべてである。神は善であれ悪であれ、あらゆる隠されたことについてすべての業を裁かれる。」**（コヘ 12：13-14）で終わるのです。

「空である」という語句の強調から、「コヘレトの言葉」は、徹底したニヒリズム、虚無主義を語っているように思えます。あるいは無の境地のような静的な事柄が最高の状態であるかのように思えます。しかし、そうではありません。結論は、主なる神様への徹底した信仰とそれを具体化する方法である律法を守ることに他ならないのです。非常に具体的でありまた実践的な事柄を勧めています。このようなことから、「コヘレトの言葉」は、旧約聖書が人間に求める事柄の中で、何が最も大切かという問いに対する、究極的な結論の一つといえます。また、それをすべての人に当てはまる事柄として提示します。なぜならば、一般の人ではない、王という立場で人生を送ったソロモン王の視点で語りながらも、「すべてが空である」と断言することを通して、王のような立場まで上り詰めるようなことがなかったとしても、真理に到達できると語るからです。旧約聖書が示す、誰にとっても大切な事柄・真理は、主なる神様への信仰と律法を守り、誠実に歩むことなのです。言い換えれば、主なる神様にすべてをゆだねて歩むことです。

わたしたち教会に集められるものは、イエス様を通して主なる神様を信じます。「コヘレトの言葉」が語る真理を受け継ぎながらも、より分かりやすい実例と対象を示されているのです。本日の使徒書コロサイ書の3章10節に**「新しい人を着なさい。新しい人は、造り主のかたちに従ってますます新たにされ、真の知識に達するのです」**とあります。「造り主のかたち」とは、わたしたちが造られた時の本来の姿です。わたしたちは、イエス様を信じることを通して、本来のものであるが、新しい人を着るのです。失ったその姿を再び取り戻すことができるのです。それが、「コヘレトの言葉」を超えて、イエス様によって教会に集められる人々に示される真理です。その真理がわたしたち人間にとっての本当の喜びであることを、これからも信じ続けたいと思います。